

## GYSF 国際共同研究報告書

地域研究学系 学系長 殿

氏 名 土屋喜生

GYSF 国際共同研究による派遣を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。  
なお、下記記載の内容については相違ありません。

## 記

1. 派遣先：都市名 ダバオ (国名 フィリピン)
2. 研究課題名：ミンダナオ民衆の個人史から再考する 20 世紀一草の根保守層の形成について
3. 派遣期間：令和 5 年 6 月 8 日 ~ 令和 6 年 6 月 5 日 (363 日間)
4. 派遣先機関名・部局名：アテネオ・デ・ダバオ大学政治学及び歴史学科
5. 派遣先機関で従事した研究内容と研究状況

GYSF の派遣期間中、私は派遣先の学部生向けの授業及び上記のミンダナオ民衆の個人史に関する研究を行いました。授業に関しては、3 年生向けの「東南アジアにおける統治と政治」、4 年生向けの「アジアからの政治理論」をひとりで担当しました。1 年間に渡り、フィリピンの大学生向けに英語で授業を行うという経験は、教師としても研究者としても自信につながりました。今回は私の研究プロジェクトの対象地域に住んでいる大学生に向けて授業を行うという貴重な機会を頂くことができたため、講義や読書課題を通して知識の蓄積に貢献しつつ、学生向けにインタビューや実地調査の研究手法の訓練を実施し、科研費を用いて優秀な学生たちをアルバイトとして雇用し、データ収集に協力してもらうこともできました。

今回の研究に関しては、ミンダナオ各地に居住する一般民衆（政治的に指導的な地位や経済的に多数の人々を雇用するような立場に無い、所謂普通の人々）を対象とした、量的にも質的にもインパクトのある個人史・生活史インタビューを収集し、彼らの経験という観点から近現代史を再考するという事に主眼があります。2020 年頃から収集してきた約 100 本に加え、今回の派遣期間中に約 150 本のインタビューを収集することができました。今後も科研費の残額を用いてさらに 50-100 本のインタビューを収集する予定ですが、ひとりの若手研究者のプロジェクトとしては既に大規模なデータ（既に合計 250 本、年度末までに恐らく 300-350 本が集まる予定）が揃いつつあると言えます。ミンダナオでの調査の一部や途中経過は、CSEAS Newsletter の 81-82 巻にて筆者の＜ダバオ滞在記＞1-3 として既に公表されています。

## 6. 研究成果発表等の見通し及び今後の研究計画の方向性

派遣期間に収集したデータの一部については、2024年6月22-23日のフィリピン研究全国フォーラム、8月9-11日に開催されたAAS-in-Asia学会にて、“In View of Female Smugglers: A History of A Port Town in Northern Mindanao and its Networks, 1940s-90s,” “On Cold War Southeast Asia: Between Cold War Studies and Area Studies”及び“Mindanawan Commoners’ Perceptions of Martial Law and Communism as Foundations for Grassroots Conservativism”のタイトルで成果発表を行いました。いずれもたくさんの参加者があり、発表内容についても賛否両論の多くのコメントや質問が寄せられました。フィリピン研究全国フォーラムで行った発表については、6月26日の日刊まにら新聞にて『密輸、ジャパゆき、活動家』気鋭の若手が新事実「光」のタイトルで一面にフィーチャーされました。

現在、史料収集の段階が終盤に近付きつつあるため、今後の予定としてはデータを一旦整理した上で、国内・海外の学会の発表を続けてフィードバックを得る予定です。2年以内に上記の3本の学会論文をジャーナル論文あるいは編著の一部として発表した後、よりまとまった単著の書籍の執筆に取り組むつもりです。

## 7. 本プログラムに採用されたことで得られたこと

まず元々東ティモール研究者としてキャリアをスタートした私にとっては、アテネオ・デ・ダバオ大学での授業担当経験は、貴重な経験となりました。単に講義経験を積むということだけではなく、ダバオの学部生たちと相談し、反応を見ながら授業内容を調整するという作業を行うことにより、ミンダナオの各地からやってきた生徒たちがどのような事を経験し、どのような事柄に関心を持っているのかについて非常に多くのことを学びました。またフィリピン人の大学教員のコミュニティの一員としてアテネオ・デ・ダバオ大学に勤務したことにより、今まで知らなかったフィリピンの教員たちの様々な苦労や大学の課題を知ることにもつながりました。そして意外な収穫としては、「フィリピンで一年間客員教授として勤めた」という経歴がついたことにより、ミンダナオだけでなく首都の大学を含むフィリピンの様々な地域の研究者たちに、私という研究者に関心を持っていただけたことがあります。例えば、AAS-in-Asiaの特別企画として東ティモールに関する自著「Emplacing East Timor: Regime Change and Knowledge Production, 1860-2010」の合評会を開催した際、20名を超えるフィリピン人の研究者が会場に来てくださったということがありました。つまり、元々の東ティモール・インドネシア研究、シンガポールの教育機関のつながりだけでなく、フィリピンにおいてもフォロワー層が広がったという意外な成果がありました。

また、「ミンダナオ民衆の個人史から再考する20世紀一草の根保守層の形成について」という今回の研究に関しては、(予定よりも担当授業にかかる時間が長くなったため)派遣中にデータ収集の方針を大きく変更しました。結果的には、授業の一環として、あるいは訓練した大学生たちに謝金を払って取ってもらったインタビューの数が、派遣期間中に自分自身で集めたものよりも多くなるということが起きました。ですが、結果から見れば、学生たち自身の多様な出自を反映した非常に多様な地域、多様な人々の物語が今回の研究に組み込まれることとなり、個人の力でデータ収集を行った場合にはアクセスが難しいような体験談が集まりました。これは本プログラムに採用されたことによって得られた意外なデータということになります。また、1年間に渡るダバオの人々や生徒たちとのやり取りが、私自身のミンダナオ経験を多角化させたため、今回の研究の視野も広がったと言えます。